

《 チュンエク大量虐殺センター 》

小島正憲

5/20、毎年、カンボジアでは国内各地のキリングフィールドで、ポル・ポト時代に虐殺された人々を慰霊する式典が催される。ただしこの日は国家の祝日には定められておらず、カンボジア国民でも知らない人が多い。ましてや外国人で知っている人は少ない。昨年、私はスヴァイリエン州の片田舎のキリングフィールド慰霊祭に参加し、現場をつぶさに観察し、それを読者各位に発信した。今年は、カンボジア最大のキリングフィールドであるプノンペン郊外の「チュンエク大量虐殺センター」の慰霊祭に参加してみた。以下はその報告である。なお、キリングフィールドはカンボジア全土に、300余箇所、存在している。

プノンペンから車で30分ほど南下した場所に、「チュンエク大量虐殺センター」がある。当日は平日だったが、道路工事や出勤ラッシュに巻き込まれ、現地に着くまでに1時間ほどかかった。午前7時の式典開始ということだったので、それに間に合わないかと思って焦ったが、人民党関係者の到着が遅れているという理由で、開始が8時に伸びており、なんとか間に合った。式典会場にはすでに300人ほどの僧侶が揃っていたが、一般人はその時刻になっても三々五々集まってくるような状況だった。そこには特別の看板や飾り物があるわけではなく、横断幕があるだけであり、中央の慰霊塔前にも花輪が3個供えられているだけで質素な感じだった。私はそこに、持ってきた花輪を供え、丁重に合掌礼拝した。

私はここがカンボジア最大のキリングフィールドなので、慰霊祭はかなりの規模で催されるのだらうと想像していたが、それは昨年の片田舎の慰霊祭と比べて、さほど盛大なものではなかった。式典終了時でも、一般の参加者は2000人ほどだった。



供養が始まり、慰霊塔前で高僧の読経の中、まず人民党幹部の礼拝が行われた。私は通訳に、「今、唱えられているお経を訳してください」と頼んだ。ところが通訳からは意外にも、「お経はパーリ語なので、まったくわかりません」との答えが返ってきた。すかさず私が、「すると、この場に集まっている普通の人たちは、だれもこのお経がわかっていないということですか」と問い返すと、彼は素直に「そうです」と答えた。考えてみれば、日本でも葬式や法要で僧侶の唱える漢語のお経を理解している人はほとんどいない。ただ有り難そうに頭(こうべ)を垂れ合掌しているだけである。私はそのように考え、「この場に参加しているカンボジア人が、お経の内容を理解していないことは、さして驚くほどのことではない」と自分を納得させた。それでも私は、参加者がその読経の音(ね)のみに心底から陶醉しているような様子を見て、大乘・小乗の違いを超越した日本人とカンボジア人の共通現象に大きな興味を抱いた。僧侶の読経には、集団催眠力があるのだろうか。ただしカンボジアの僧侶の読経は、日本の僧侶の読経とは違い、甲高いものであり、私には雑音にしか聞こえなかった。余談だが、チベット仏教のラマ僧の読経は、ダミ声に近い低さであり、数十名のラマ僧がいっせいに読経すると、それは地響きのように聞こえる。その後、高僧は特別席に、人民党幹部はその脇に着座した。

次ぎに第2幕として、慰霊塔前の広場で、ポル・ポト時代の歴史の朗読が行われた。まず女性朗読者が、ポル・ポト時代の惨劇の様子を、哀調を帯びた声音で切々と語った。次ぎに男性朗読者が、「ポル・ポト時代の悲劇を再び繰り返してはならない。そのために人民党と共に前進しよう」と声高に語った。続いて青年・女性・チャム族代表の発言があり、人民党への感謝の言葉が繰り返し語られた。その中で私が注目したのは、チャム族代表の、「現在進行中の国際裁判は第2ステージで終わりにしよう。カンボジア国民は団結し、社会を安定させ、経済を発展させよう」という発言だった。



第3幕は恒例のポル・ポトの悪業の再現劇だった。それはさすがにスヴァイリエン州のものとは違い、登場人物も多く、煙や射撃音などもあり、本格的な演劇だった。しかしながら参加していた人たちの間から、ときおり笑いが漏れたことに、私は驚いた。もちろん涙を流している人もいたが、スヴァイリエン州のときと比べると、はるかにその数は少なかった。この日の参加者が若者中心であり、当時のことを体験している40代以降の人たちが少なかったことにもよるのだろうが、私には異様に感じられた。

この演劇は、筋書通り、人民党の旗が打ち振られ、人民党幹部の写真が掲げられ、兵士や人民が「解放万歳」を叫ぶ長いシーンで終わった。これらを見終えて私は、「結局、この演劇も人民党の宣伝のために使われたわけで、カンボジア人民にとっては見飽きたものであり、しらけていても当然なのかもしれない。真剣に見入っているのは、現地の事情を中途半端に知っている外国人だけなのかもしれない」と思った。



第4幕として、人民党幹部の高僧への答礼儀式が行われた。それは椅子に腰かけた高僧たちの前に、人民党幹部がひざまずき、たくさんの供物とともに、合掌礼拝するというものであった。私はこの光景を間近に見て、「人民党が仏教を政治利用しているのではないか。カンボジア人民はほとんどが仏教を信じている。人民党はそれを利用し、自らの政権基盤を固めようとしている」と感じた。そのとき、高僧たちはお経を甲高い声で唱えながら、白い花びらを人民党幹部の頭上に撒き散らしていた。このお経もパーリ語で、通訳にもわからないということだった。もちろん人民党幹部にもちんぷんかんぷんなものにちがいない。それで

も人民党幹部たちは神妙な顔で、高僧たちに頭(こうべ)を垂れていた。私が通訳に、この高僧たちの出身寺院を聞いてみると、「人民党と縁の深い寺院だろう」という答えが返ってきた。ポル・ポト時代には寺院はすべて破壊され、経典は焼き尽くされ、僧侶もそのほとんどが殺されたり、還俗させられたりした。その後のカンボジア仏教の再生の過程について、詳しく研究してみることが必要だと思う。

慰霊祭はこの答礼儀式で終了した。すると参列していた300名ほどの僧侶たちの中から、そそくさと列の後部へ移動するものが少なからず居たので、私は彼らを目で追った。彼らは木陰に入り、さっそくタバコを吸い始めた。そして一服すると鉢を抱え、列を整え、一般参加者の中に托鉢に入って行った。その後ろには、大きな袋をもった若者たちがぞろぞろと付き従っていたので、不思議に思っ聞いてみると、その若者たちは、僧侶が托鉢でもらった物品を袋に入れて運ぶ役だという。

カンボジア最大のキリングフィールド慰霊祭では、ほとんど外国人メディアの姿は見かけなかった。その後、「チュンエク大量虐殺センター」は、何ごともなかったように一般の日に戻った。9時半ごろ、外国人観光客が来て、たくさんの慰霊祭参加者にビックリしていた。カンボジアでも、ポル・ポト時代はすでに風化し始めている。

以上